

Title	1920年代から1930年代にかけての住環境に関わる運動からみる型而工房の独自性
Author(s)	亀野, 晶子
Citation	デザイン理論. 2013, 61, p. 19-33
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53431">https://doi.org/10.18910/53431</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 1920年代から1930年代にかけての住環境に関わる運動からみる型而工房の独自性

亀野晶子

キーワード

型而工房, 標準家具, 畳摺り, 婦人雑誌, 生活改善  
(the keiji kobo), hyoujun kagu, tatam zuri,  
women's magazines, Improvement of Quality of Life

はじめに

1. 型而工房について
  2. 当時の住宅と椅子座
    - 2-1. 同潤会アパート
    - 2-2. 橋口信助の「あめりか屋」と同潤会, そして型而工房との比較
  3. 同時代の運動と組織との比較
    - 3-1. 木曾恕一の室内意匠観と型而工房との比較
    - 3-2. 森谷延雄の空間への志向と型而工房との違い
  4. 婦人雑誌「婦人之友」について
- おわりに

はじめに

型而工房の独自性を同時代 — ここでは型而工房の活動した1920年代末から1930年代にかけてを対象とする — の住環境に関わる運動と比較して明らかにしたい。

それは雑誌「婦人之友」や「婦人公論」誌上において販売を行った点と型而工房の標準家具といわれる商品に「畳摺り」がついている点に現れている。その評価されるべきは雑誌を媒体とした販売経路をこの時代を選択・実行した先進性についてではなく、販売対象を明確にしたことが一つとそれを踏まえた造形 — 畳摺りを持っていることの二つである。畳摺りとは、机や椅子の脚の下に取り付けた、畳の損傷を防ぐための横木の事を指すが、型而工房の標準家具にはその畳摺りが付されている<sup>1</sup>。この二つが型而工房の当時一気に持ち上がった生活改善運動やそれに伴う建築・デザイン運動の枠内には収まらない目的意識を明らかにしている。それは日本という国、風土、そして、1920年代末から1930年代初めにかけての社



図1:「型而工房」小椅子,  
1927  
(畳摺りのある椅子)  
『生産工業的家具』昭和10  
年12月発行

会情勢を踏まえたうえで、普通に暮らす人々の生活をより良くしたいという思いを具体的に実現するという現実的な意識である。

## 1. 型而工房について

型而工房は東京高等工芸学校講師だった蔵田周忠の下に集った同卒業生——松本政雄、豊口克平、高橋実、伊藤幾次郎、小林登、中島賢次、斉藤四郎、手塚敬三ら——と池辺義敦、岩井良二、佐藤桂二らを同人とし、「实际的・理論的な近代量産家具を実験的に生産した運動」(\*1, p.1)を1928年から1940年頃<sup>2</sup>まで行った。型而工房の活動は調査・研究とその発表としての「ラポルト」の雑誌『国際建築』への掲載、そしてその実践としての家具の試作研究を経て、標準家具の製作・製造頒布、また研究発表や展示会、加えて「国際建築」,「婦人友」,「婦人公論」への寄稿・執筆など多岐にわたるものである。

型而工房に関する研究は1980年の豊口克平氏・島崎信氏の「型而工房とその家具のデザイン研究」<sup>3</sup>, また1987年に出版された『型而工房から』(グルッペ5編)<sup>4</sup>が型而工房同人、豊口克平氏による包括的な活動の経緯と成果、そして当時の状況などを記したものとして挙げられる。また1962年に出版された『デザイン』,「日本の近代デザイン運動史3」<sup>5</sup>の中では、蔵田周忠・豊口克平の型而工房に対する述懐が、出原栄一氏の分離派建築会を始めとする日本の近代造形運動の流れとそれらに影響を与えたであろう海外の近代デザイン運動、そして建築から工芸・家具へと進んだ状況の概要とともに掲載されている。

また1998年には小林洋氏により同人の活動、経歴が改めて整理されている。その他にも型而工房の活動の方法論を論じたものとして2009年、2011年の敷田弘子、アンヌ・ゴッソ両氏の研究<sup>6</sup>も包括的な型而工房の調査・分析と生産に対する合理的思想の体現に対するが挙げられる。具体的な型而工房の活動を明らかにしたものとしては2008年の松戸市で開催された展覧会<sup>7</sup>がある。その展覧会図録<sup>8</sup>のなかで森仁史氏は、標準家具の材料の入手しやすさや規格性、量産へむけての設計<sup>9</sup>も含め、当時の状況のなかで総合的なデザインが現在のモダンデザインに通じると評価している。

先行研究は1930年代までに機能主義的な家具つまりデザインという考え方を型而工房が持っていた事を評価している。またその実践までの一貫した活動を評価すると共に、その販売を婦人雑誌で行った頒布について、豊口・島崎両氏の論文でも「依頼主(消費者)をも準備させた総合的なデザイン活動」(\*1, p.45)として述べられている。本論ではこの「依頼主(消費者)」が上述した販売対象を明確化したことを指すが、この明確化がこの当時までの住環境の変遷のなかで如何に革新的であったかを明らかにしたい。また型而工房における蔵田周忠の影響もここから見えてくるのではないかと考える。

## 2. 当時の住宅と椅子座

ここで一度この時代までの日本の住環境の変遷、特に椅子座がどのように受け入れられたかを見ておく必要がある。1923（大正12）年の関東大震災後建設された同潤会アパートにもあった書斎と名のつく部屋が見受けられることに象徴される（同潤会アパートについては後述する）、日本の住環境をめぐる状況の確認である。椅子座と床座との問題を象徴的に物語っている最初期の出来事の一つにアメリカ公使・ハリスとの会見が挙げられる。椅子座の文化の公使と互いの文化規範のまま同等の立場を表明するために、椅子と高く積まれた畳という状態での会見であった。その後文明開化を迎えて椅子座が住宅に入ってきたときも、主に接客空間としてであった。上流階級における接客空間、それが日本での椅子座の最初期の有り様であった。洋装の来客をもてなす空間が必要になり、和洋折衷住宅が生まれ、また洋間として書斎が生まれた。ここで重要なのは接客が家の主人、つまり男性の領域のものということである。この傾向は上流階級から中間層へと移っていく。このように椅子座は日本の比較的上流の住空間へ浸透していった。つまり後述する生活改善運動によって、椅子座の衛生上、健康上、作業効率上の合理性などが挙げられる前は、椅子座の文化は上流の男性社会のものであったといえる。西洋の文化を踏襲した椅子座という形式のみを持ち込んだ結果、公私の分離・寝食の非分離の状態のまま西洋文化を受容していく。それが「和＝床座」、「洋＝椅子座」の構図を生むことになった。同潤会アパートにも「書斎」と名のつく部屋が設けられた。しかし同潤会アパートには合理化受容の計画もなされていた。

このような社会の流れの中、型而工房は椅子の研究や試作などを行っている。「理論と実際が一致せず」との言葉もあるが、しかし1928年に開催された型而工房の第一回展に出品された小椅子には「規格材による構成、畳摺りの使用など合理的な特徴」（\*1, p. 37）を既に備えていた。この最初期の段階から畳摺りがついていることに注目したい。上記でみたようにこれまでの椅子座は家の男性が接客に用いるためのものとして位置づけられ、それは洋館もしくは洋室で整えられた場に置かれているものであった。この椅子に畳摺りがついているということは、畳の部屋での使用を念頭においていたことになる。洋間だけではない接客の為の椅子とも、接客の為ではない椅子ともとれるが、ともに和室に椅子を置く事を前提としていたことになる。この和室に椅子という考え方は、今までの慣習の中では色々な意味で画期的である。和室に敷物を敷いて様式家具を置くのとは本質的に全く異なる。洋風の空間、洋風に整えた空間に椅子が在るのは当然のことであるが、この畳摺りの家具は畳に直接置く事を念頭に置いている。という事は、従来通りの和室の生活に椅子だけを加える生活を送れるイメージを持っていた事になる<sup>10</sup>。それが次に示す同潤会アパートでの豊口の居室の写真にも現れている。現在では見過ごしてしまう可能性もある光景だが、接客という公以外の部分で、しかも一般家庭で畳

の部屋に椅子が置かれることは当時としては革新的であったことは確かである。それは西洋文化受容が推進された結果の日本文化批判にも影響していると考えられるが、日本の文化・慣習を基礎において合理化を進めるという思想があまりなかった事の現れである。そのような中、型而工房は日本の従来住宅<sup>11</sup>と西洋文化、合理化の体現とも言うべき椅子を切り離すことなく思索し、畳摺りのついた標準家具という形にした<sup>12</sup>。では次に様々な合理化を住宅という形にした同潤会アパートと型而工房の関係を見ていきたい。

## 2-1. 同潤会アパート

同潤会は1923（大正12）年の関東大震災後の東京・横浜の住宅難解消の為、震災の翌年内務省による財団法人として帝都復興計画の一つとして1924年5月に発足する。鉄筋コンクリート造の集合住宅、それに伴う福祉施設、木造平屋の住宅群の応急建設、農山漁村の調査、民家の改良など多岐にわたる活動を1931（昭和16）年まで行った。震災後の集合住宅として建てられた同潤会アパートの特色としては日本で最初期の鉄筋コンクリート造アパートだという事と、社会啓蒙の為の設備と住宅形式をもっていたことである<sup>13</sup>。同潤会アパートは共同洗濯場や物干スペースとしての屋上、セントラルヒーティングなど当時の一般住宅とは一線を画す設備が整えられていた。このような最先端のアパートには戸惑う人々も多かったが、想定通り新中間層のサラリーマンや文化人知識人たちも多く入居した（\*4, pp.182. 183. 186. 187）。平面計画の特徴としての挙げておかなければならないのは寝食分離である。従来の日本の暮らしでは当然の前の、食事と睡眠を同じ場所で行うことを廃すことが寝食分離である。寝食分離は合理的・有効的にそして衛生的に空間を使用できるという考え方である。日本の従来の住宅は上述したように公私の区分や、行事の為の部屋が住宅の中の大きな部分を占めてい



図2：豊口居室，1931，（\*3, p21）

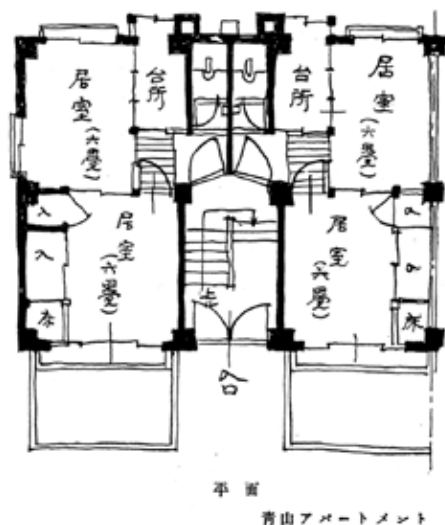


図3：青山アパート平面図  
『国際建築』3巻2号，昭和2年2月

た。そのような慣習や行事よりも日常の行動に重きを置いた平面計画が寝食分離と共になされているのが、同潤会アパートである。この同潤会アパートに住んでいた蔵田の元に学生であった同人が集い、型而工房が発足し、その後豊口ら同人も住まうこととなる<sup>14</sup>。その革新性の影響を、まず独身アパートで、その後家族向けアパートで生活をした豊口の言葉にみてとれる<sup>15</sup>。近代的なデザイン思想に触れていた豊口らや、上昇志向を持つ人々には魅力的な生活が送れる準備がなされていた。しかし同潤会アパートですら、生活全てを近代的に変えるには金銭的な問題があったことも確かなようである<sup>16</sup>。この二つを実体験として得たことは型而工房の活動に重要な意味をもつのではないだろうか。このようなアパートの共用部分、一室の居住空間に革新的な変化をもたらした同潤会アパートであるが、集合住宅ではなく一戸の住宅での変革を目指す動きもあった。橋口信助の「あめりか屋」である。

## 2-2. 橋口信助の「あめりか屋」と同潤会、そして型而工房との比較

「あめりか屋」は橋口信助が1901（明治34）年から単身渡米し、1909（明治42）年にシアトルから2×4構法のプレハブ6棟と建築部材等を持ち帰り帰国し、室内装飾、後に住宅の販売を行った。また橋口は1916（大正5）年頃に月刊誌『住宅』を発行し、「住宅改良会」（大正5年から昭和18年までの27年間）を発足させることで、啓蒙運動を開始する<sup>17</sup>。創立の信条は「都市の施設方針がすべて西洋式になっている今日、其の中に建築される住宅も西洋式にならねばならぬ事は今更言を改めて云ふまでもない事である」<sup>18</sup>というものだが、これは橋口の渡米中の経験から得られた椅子座の生活は上流階級の為のものではないという確信が元になっている。日本でも全くの椅子座の生活がどの階級の人々にも可能だという考えを持ち、だからこそ建築家<sup>19</sup>として住宅の新しい有り様を求めるのではなく床座から椅子座への転換を押し進める立場、従来の日本の住宅と西洋文化の住宅とを相容れないものとした立場<sup>20</sup>に立って様々な活動をおこなっている。規模や活動期間などの差はあるが、機関誌の発行や婦人雑誌への寄稿など型而工房と通じる所が大きい。しかし似ているようで根本的に異なることも明らかである。椅子式への改良の推進、その過渡期での折衷住宅の様式化への批判、日本の生活へ適応させた椅子式の住宅というのが橋口の住宅改良の椅子式への考え方だが、日本の生活へ適応させるための折衷案でもない文化醸成とも言うべきことへの解答は見いだせない。椅子座の文化圏の人々も裕福であろうがそうでなかろうが家に住んでいる。家に住んでいる限り椅子座の合理的な生活を送っているという事実から橋口の活動ははじまっているが、それをそのまま日本に持ち込んだ結果として経済的余裕のある上流階級の人々への供給<sup>21</sup>となった<sup>22</sup>。ここに橋口のなかでの椅子式と座式の生活様式の対立が見て取れる。一方、型而工房はというと、橋口同様に日本の従来の生活の改善・合理化を目指していたが、それを如何に実社会へ反映させるかを

重要視していたことが見えてくる。その違いが家具という道具に現れ、またそれを西洋家具、様式家具という枠組みから外したところ<sup>23</sup>に現れている。その先に畳の部屋へ、椅子や机単体を置くことを可能にする畳摺りの標準装備があると考えられる。

### 3. 同時代の運動・組織との比較

住宅を含む建築の近代運動については、1920年に設立宣言をした分離派建築会がその先駆けといわれている。その後関東大震災後に創宇社建築会（1923年）、そして京都で上野伊三郎（1892-1972）らの日本インターナショナル建築会（1927年）が組織される。この頃モダニズム建築と云われる近代建築運動が世界的にみて盛んに行われ、日本もそれらに追随する形で建築の新たな表現と理論を模索・発表していた。それに加え日本の場合は従来の建築と西洋建築との狭間で揺れ動き帝冠様式に代表される和と洋の問題も盛んに議論された。

社会的な生活改善運動も種々起っている。西洋文化受容や女性の社会的地位の変化、また第一次大戦期の好景気による消費社会批判や都市部の新中間層の出現、そして関東大震災など様々な要素が契機となった運動である。上記の建築・デザインの住宅を含む近代運動とも密接に関わっている。先述した橋口信助の「あめりか屋」と機関誌「住宅」そして「住宅改良会」もその一つであるし、この頃盛んに行われた博覧会での住宅展示も同様啓蒙運動としての意味を持つ。蔵田周忠の分離派建築会参加のきっかけともなった1922（大正11）年の「平和記念東京博覧会」にも文化住宅と言われる住宅の展示があった。鉄道会社による郊外住宅の開発も挙げられる。このような形で多くの人々は新しい住宅を目にする機会を得たことにより、新しい生活への理想や羨望も高められ、それに伴い生活改善の運動も盛んになっていく。その一つに政府が関わったものとして「生活改善同盟会」がある。これは文部省の（同様の動きは内務省、農商省においてもあった）後援を得て、衣食住の改善・簡易、悪習打破等の指摘で全国的な活動を行っていた。講演・講習による啓蒙と実物の宣伝や実行、会報や報告書を通じての活動であったが、住宅に関する実際的な方向としては、椅子式<sup>24</sup>を奨励し欧米の住宅形式に修正を加えるのが近道だとする方法は、橋口の「あめりか屋」と近いものがあった。後述の羽仁夫妻の活動や橋口の活動など、様々に民間からの自発的運動も加わり、生活改善運動は一言ではくくりきれない性格をもつようになる。そこでは慣習や、衣食住の合理化が目指され、新しい生活知識や技術による生活向上が目標とされていた。そのうちの一つが女性の家庭での位置や役割、またその自覚などに関わるものである。それが具体化したのが台所の改善に見られる家事の合理化である。それらは上述の同潤会設計の集合住宅などにも反映された。関東大震災後も第二次世界大戦敗戦後も生活改善の流れは続いていく。戦後、建設省がGHQの後援で行った「住宅と都市問題講座」でも「住みよい文化的な住宅と能率的衛生的な都市の建設」<sup>25</sup>が敗

戦国日本の課題としてとりあげられている。このようにその時代・社会情勢・政治的理由により様々な運動・団体が官民共に続いていった。

また明治からの、輸出を目的とする殖産興業問題解決の一端として、工芸分野でも様々な団体が組織されている。ここで関係するものとして東京高等工芸学校教授たちの「櫛葉会」と「木のめ舎」が挙げられる。「櫛葉会」(1918年)は東京高等工業学校卒業生を中心とする家具室内装飾の研究団体で、東京高等工芸学校教授の木檜恕一によって設立され、翌年には月刊誌「木工と装飾」も創刊された<sup>26</sup>。ここには森谷延雄(1893-1927)も所属していた。その森谷が結成したのが「木のめ舎」(1927年)で、美しい家具と生活の関係や詩的な室内演出など独自の理想を掲げていた。以下で木檜恕一、森谷延雄からみる各運動の違いを見ていきたい。その違いを見ることで後述する型而工房の作品の独自性をより明らかにできると考える。

### 3-1. 木檜恕一の室内意匠観と型而工房との比較

木檜恕一は東京高等工芸学校創立と共に木材工芸科の教授となる。それ以前に「櫛葉会」設立や、「生活改善同盟会」の創立に関わる。東京高等工芸学校赴任前の1921-23年には文部省在外研究員として欧米に留学している<sup>27</sup>。木檜恕一の著作「住宅家具設計及製作図」<sup>28</sup>の凡例に「本書の図面は特に普通の家具に就きて設計の根本を示したもの」(\*6, 凡例)とある。そして内容は室内写真やスケッチ、図面が載っているがそれらは西洋の家具の装飾を伝統的な様式から近代的なそれ<sup>29</sup>に変更したものである。写真からも木檜にとって住宅家具とは西洋家具ことであるのが見て取れる。それは木檜も住宅改良には西洋家具つまり椅子式が必要だと考えていたからであった<sup>30</sup>。加えてその実行の困難な理由を住宅の中に、主人の使用する家具と主婦の支配に属する部屋で用いる家具の二種類があり、後者が困難の理由だということ述べている<sup>31</sup>。その理由は部屋の持つ複雑性と、主婦の考え方・思想の為だと考えている。家具の問題を住宅内での男性のものから女性のものへと発展させているところは後の型而工房も同じであるが、しかしここで両者の根本的な違いを見いだすことが出来る。それは木檜が挙げた主婦の支配の属する部屋の名称——居間・食堂・子供室・寝室——が表している。従来の日本の住宅にはそのような寝食分離を表した部屋の名称は見つけられない。先にも挙げたようにそれが公に現れたのが同潤会アパートであり、橋口の持ち込んだ西洋住宅である。木檜の思索の前提には合理化された平面計画が有ったことが、先の著作に現れた様々な家具の図版や写真からみてとれる<sup>32</sup>。合理的な生活へと変化をもたらす、家具を置くことが出来る前提の有る家・人々へむけての文章である。木檜の文章からはそのまま型而工房へとつながるかに見えるが、図版は写真を見る限り全く異なるように見える。それはこの前提があるからに他ならない。食事をする為の部屋に食事をする為の家具を置く。同様に居間、寝室ではくつろぐ、寝るという目的



が存在する。この目的ごとに部屋と家具を配すことが木檜一の室内装飾や室内意匠を支えている。これは蔵田がバウハウスを評価したときの「統一的空间」<sup>33</sup>と限りなく近いのではないだろうか。歴史主義でもない、様式主義でない、人間の生活の目的に適応するもので、室内を整えることが木檜一が目指した、合理化への家具であり、そこそが型而工房との違いとなる<sup>34</sup>。

### 3-2. 森谷延雄の空間への志向と型而工房との違い

では蔵田周忠とも親交があり、家具を巡る運動家として先んじていた森谷延雄はどうだったのだろうか。森谷は東京高等工芸科学学校において海外の工芸運動について語る数少ない教師の一人であり、生徒からも慕われていたようである。その森谷の理想は室内装飾が詩的な空間を成立させること<sup>35</sup>と中流家庭に向けた廉価で実用的な美しい洋家具を普及させることであった。森谷の急死により活動は続かなかったが、その運動を豊口はドイツの表現派に通じると言っている<sup>36</sup>。加えて森谷にはウィリアム・モリスと同様の考え方があった<sup>37</sup>。それはモリスやドイツ表現主義といった歴史主義の後のある種の様式主義であり、近代の合理化への信仰ではなく、美しさに重きを置いた考え方だった<sup>38</sup>。森谷の場合家具単体ではなく、行動を目的にした合理化の為の部屋でもない、詩的な美しさを含んだ空間としての部屋が必要であったということになる。これも蔵田がウィリアム・モリスやウィーン工房を評価した統一的空间につながる(\*7)。このことは森谷の廉価な量産への家具に対する姿勢でも同様であり、ここが型而工房との違いとなる。森谷延雄と型而工房とは空間としての室内の有無、生活改善に求めたもの、この二つが決定的に異なっている。

木檜、森谷をとおして見える統一的空间<sup>39</sup>というものは空間としての部屋とそれを内包する住宅が必要不可欠である。蔵田もウィーン工房やバウハウスの評価で、その統一的空间を作る為の技術を有しているか、またそれを具現化するシステムがあるかという部分に着目していた。しかしその統一的空间形式はイギリスや、オーストリア、ドイツのデザイン運動の過程であることを忘れてはならない。それらの国はもともと椅子座の文化を持ち、その延長線上にあるデザインの大きな変革の一つであった。しかし日本は床座という全く異なる文化規範の上に椅子座を導入することで、従来の歴史、文化とまた近代化という別な要素も含めて変わらなければならなかった。森谷の求めた美も、木檜の求めた合理化も、統一的空间形式を持ったならば従来の日本の生活・住宅の延長線上に乗ることはできないということになる<sup>40</sup>。統一的空间形式を持てる、つまり経済的負担を負える人たちのみが生活改善運動の実際的な変化を得られる人たちとして設定されているなら問題はないのだが、そうではない大衆とも新中間層とも言われる人々が生活改善運動の対象者であればこそ、その経済的負担は大きな問題となる。だから

らこそ蔵田や型而工房の同人は統一的空間形式をとることなく、それに左右されない家具を標準家具としたのではないだろうか。それは室内意匠という住宅・家具というモノの変革ではなく、その変革から生まれる生活の変化、暮らしの変革を目的としていた。それが造形作品と実際に使用出来る販売商品との違いとして計画にあらわれた。統一的空間を必要としない家具を模索し、形にすることであった。それは、西洋の近代デザインの流れを受け入れながら日本の風土や慣習といったものだけでもない、社会的問題を的確に見据え、現実的に解決しようとする取り組みの表れである。その解答が女性を対象にしたこと、統一的空間形式を持たないことの二点であり、それを实际的に、現実的にするため婦人雑誌での啓蒙・販売と畳摺りを持つ家具を商品として販売するという活動へつながったと考えられる。そのことが畳摺りの解説によく現れている。「椅子類の畳摺り 型而工房の家具の多くは畳摺りが付けられている。その頃は洋風化も進みだした住宅環境であったが、それでも、まだ住宅に占める畳部屋の割合は多く畳の生活から抜け切れない当時であった。そこで新しい生活を主張する同人達はむしろ畳の部屋でも積極的に椅子を使用できるように考え畳摺りを付けた家具を考察する。」(\*1, p.36)ここからも構造や造形よりも椅子の生活領域を広げることに重きが置かれていたことが分かる。

これが木檜怨一、森谷延雄らの活動と異なる部分である。大量生産、標準化といったこと的前提にある近代化された住宅との統一的空間、もしくはモリスのように美しさが生活を良くするとの思想の先にある詩的な心地よさを求めた統一的空間、内容や目標の違いはあるが、室内と統一的空間形式を切り離すことのなかった二人との違いが型而工房の独自性として挙げられる。

#### 4. 婦人雑誌「婦人之友」について

橋口信助が広告を掲載し、型而工房同人が寄稿を行い、商品販売を行った「婦人之友」を詳しくみておきたい<sup>41</sup>。「婦人之友」は名前の通り、婦人つまり成人した女性または結婚した女性を対象とした雑誌である。婦人という言葉は大正期には意識の高い女性を暗に示していた事を考えるとこの雑誌は教養のある、意識の高いまたはそれを求める女性のための雑誌であった<sup>42</sup>。「婦人之友」は自由学園創始者である羽仁吉一（1880-1955）・もと子（1873-1957）夫妻によって前身雑誌から作られていた。日本で初めての女性ジャーナリストと言われる羽仁もと子が報知新聞にて同僚の羽仁吉一と知り合い結婚し、1901年に退職する。その後『家庭の友』（1903（明治36）年）を創刊し、後に「家庭女学講義」と共に、「婦人之友」と改題された。そしてその主張と実践の場として、その読者の子への教育の場として、1921年自由学園を創立する。生活する上での高い理想を持ちながらも、実用に役立つ知識や情報、技術を伝える雑誌であった<sup>43</sup>。

だからこそ橋口信助も型而工房も啓蒙活動を行うことができた<sup>44</sup>。明確な販売対象設定は、この時代の家具——特に椅子座式の家具——を取り巻く状況を見れば、実際に生活を担う女性に変革の意思をもたせ、実際的な生活の変化をもたらす最良・最適の方法だった<sup>45</sup>。統一的空間形式や様式家具等のデザインの思想ではなく、実際の生活者に従来の生活にはないモノを受け入れてもらう、このことがなければ生活改善と言われる生活の変化など到底現れ得ないとの考えがあったのではないだろうか。

## おわりに

まず型而工房は現在と同様のデザインを1920年代初めから実践的に商品に反映させた団体として、その〈作品=商品〉の形、方法論ともに評価されている。しかし今回このように同じ時期にあった様々な運動や社会的流れとそれぞれ照らし合わせてみる事により、型而工房の独自性を一層際立たせる事が出来た。それは『婦人之友』等「婦人雑誌」を販売の媒体とした事にみられる、明確な販売対象設定と、その〈作品=商品〉の形——畳摺り——に現れている家具のありかた（統一的空間形式をとらないこと）である。型而工房がデザインのみを考えた、より良い造形をもったものではなく、生活の変化を生む、暮らし方をも変える力をもったものを家具として考え、形にしたことに現れている。

実際、蔵田や豊口が同潤会アパートに住み「婦人之友」の購読層と比較的近い生活を送っていたことも関係しているだろう。また従来の慣習や習慣にとられない平面計画がなされた同潤会アパートでの生活が、型而工房の目指す「新しい」生活の一番身近な具体例であった。事実写真にある豊口の居室には椅子とテーブルを畳の部屋に置いている事で寝食分離がなされていること、そして統一的空間形式を持たない家具が和室におかれ、その他の銅管パイプ椅子などと共に、ある種、室内の調和を生み出している。このように実際の暮らしのなかで、いかに椅子座を取り入れ、いかに生活に変化をもたらすか、それを合理化、生活改善へとつなげることが型而工房の軸にあったと考えられる。

ただし、従来の接客空間から発生した椅子座の空間が新中間層へも一種のステイタスとして広がっていたであろうことは否めない。それは同潤会アパートに書斎という名称があったことからわかる。しかしその新中間層が西洋文化受容の合理性の問題のなかでは官民ともに多くの受容者だったことが重要である。つまり、型而工房は「新しい」生活に対する志向を持つ新中間層を販売対象とし、その販売媒体を「婦人雑誌」とすることで、男性社会から発生した椅子座を、実際家事労働を行う女性の側へと移行させ、生活・暮らしに関わる部分での変革に取り組んだということである。

また橋口との比較でみたように、合理化への道筋での西洋文化受容を受け入れながらも、日

本の従来の文化に対する意識の違いが見て取れる。型而工房は文化批判をするのではなかったが、それは当時の社会や大衆、庶民、新中間層と言われた人々の経済状況をも加味した上での実際的な行動だったと言えよう。文化醸成への働きかけは、蔵田のそれまでの知識や今和次郎ら様々な人々との交流から、文化がどのように形成されるかについての知識やそれについて思索することをしてきたからではないだろうか。

女性の家事労働の合理化や子供の健康や衛生に西洋文化の合理性は様々採り上げられていたが、啓蒙運動から先の実際的なモノとしての家具となるとその変化を促すようなものは身近な所には全くない状態であった。それまでの男性社会に対する椅子座の文化、統一的空间を必要とする室内意匠としての家具ではなく、少しの変化で「新しい」生活に向かうことが出来る、その変化の為の家具の製作、販売を行ったのが型而工房である。そこに構成主義的要素や現代にも通じるデザイン性が評価されているのだが、それだけではなかったことが、同時代の他の運動や人々との比較から明らかに出来たと考える。経済的制約から生活改善への希望・要望や意識はあっても実際の生活は以前と変わらぬものを送らざるを得ない人々に向けた家具だからこそ、従来の畳に従来の椅子を置いてみるのではなく、従来の畳の部屋に畳摺りのついた新しい椅子を置くことで、生活・暮らしの変革を起こすきっかけにしようとしたのである。

#### 註

- 1 「畳摺は構造上からみれば強度を出すことにつながる利点を生み、また方形の標準型椅子の独特なフォルムを産みだした要素でもあった。」豊口克平・島崎信「型而工房とその家具のデザイン研究」(『武蔵野美術大学研究紀要13』, 1980年) (以下\*1とする) p. 36
- 2 活動の元となる集まりはそれより以前から蔵田周忠の自宅(同潤会アパート)で行われており、同人が卒業を機に結成された。
- 3 \*1
- 4 グルッペ5・豊口克平編『型而工房から——豊口克平とデザインの半世紀』(美術出版社発行, 1987年) (以下\*2とする)
- 5 出原栄一「デザイナー・グループの誕生」『日本の近代デザイン運動3』(『デザイン』第30号, 美術出版社, 1963年3月号) pp. 31-32  
蔵田周忠「型而工房」『日本の近代デザイン運動3』(『デザイン』第30号, 美術出版社, 1963年3月号) pp. 34-35  
豊口克平「付記」『日本の近代デザイン運動3』(『デザイン』第30号, 美術出版社, 1963年3月号) pp. 35-36
- 6 Groupe standardisation (Anne Gossot) 「型而工房の方法論」(Invention of Industrial Design: the Methodology of Keiji Kobo 型而工房) (WP-P-01-IRMFJ-Standardisation, 2009年7月), アンヌ・

- ゴッソ、敷田弘子「型而工房における大量生産の方法論」(『家具道具室内史学会誌』第3号、2011年) pp.142-148
- 7 松戸市教育委員会、(財)松戸市文化振興財団「結成80周年モダンデザインの先駆 型而工房展」(松戸市文化ホール、2008年11月4日-23日)(以下\*3とする)
  - 8 森仁史編集「結成80周年 型而工房展 — 所蔵品による企画展示」(財)松戸市文化振興財団、2008年)
  - 9 「国際建築」5-9(昭和4年9月発行)の松本政雄訳述の一文「家具の定型化」アドルフ・ゲー・シュネックがある。ここでは定型化と塗料製作が同義語とされ、より良品質にしなければならないと冒頭にあるが、何が定型化されるべきかとの問いかけから文章は続く。このようなものを紹介したいという部分にも型而工房の作品の方向性をみる事が出来る。
  - 10 「特定の一家族に対してではなく、典型的な一家族に対する用意であった」(\*1, p.6)にある山田守のジートルングの感想から見た住宅の標準化の原型として挙げられた文章から、この実際のな形の現れが畳摺りだと見る事が出来る。
  - 11 「蔵田は一方で、伝統的な日本建築がもつ合理性に目を向けるよう指導している。」(\*1, p.20)にもあるように、合理性という観点から西洋文化も日本文化も等価なものだとしていた、蔵田の志向、影響をみる事が出来る。
  - 12 \*2, pp.508-513に森山明子氏の解説で豊口のデザイン思想についての記述でも同様のことが述べられている。「椅子を生活に取り入れることで生活の改善・合理化を図ろうとする。しかしそれは、かならずしも西欧的生活様式を意味しないことである。」型而工房の畳摺りのついた標準椅子の座面の高さが当時の一般的な椅子よりも10cm以上低いことにも触れている。またブルーノ・タウトが商工所工芸試験所の囑託となったときに豊口にとって「日本の伝統の安直な近代化を考え直す根拠と機会」となったことも述べている。つまり漠然と持っていた近代化へのデザイン的な思想を確実に方向付けたのがこの時期だということになる。ここに形而工房の標準家具で現れている日本の従来の住宅へ適応させうる造形と同様、その販売領域を女性としたことの影響をも蔵田周忠に見ることが出来ると考える。
  - 13 同時代建築研究会編『悲喜劇・103-年代の建築と文化』(株式会社現代企画室発行、1981年)(以下\*4とする)この鉄筋コンクリートの集合住宅のなかには、不良住宅地区の改良を目的としたものも含まれる。藤森氏はこちらに重点が置かれていると述べている。藤森照信『日本の近代建築(下) — 大正・昭和編 —』(岩波書店発行、1993年) pp.147-152
  - 14 代官山の独身者アパートに住みだした、この年(1930(昭和5)年)、豊口は埼玉県の商工技手として働きだしている。同潤会アパートの家賃が9.5円、給料が70円とある>(\*2, p.30, 45)。また江戸川の家族向けアパートの収入平均は100円程度で家族3人程度とされている>(\*4, pp.186, 187)統計局のHPに掲載されている数字では1931(昭和6)年で労働者の平均賃金が75.19円、給与生活者の平均が81.47円、1936(昭和11)年で、前者が80.65円、後者が88.80円となっている。東京都心部のみの集計ではないが、\*4にも「エリート層とはいわぬまでも少々上昇志向をもつサラリーマン層といえるだろう」とある。これを新中間層と位置づけ本論の対象層としていく。

- 15 「何といってもモダン生活である」「手作りの一種の近代家具のトライアル」「玄関には傘立てがついているし、台所にはセメントのシンクながらガスレンジと一緒に設備されている。壁付きの食器戸棚も小型ながら備えてあるところ、今日のアパートとなんら変わることがないと言えるかもしれない。」（\*2, pp.45-47）
- 16 「家具が欲しくなる。当時七十円の月給では揃えるのにはちょっと手が出ない。」「一家を構えたとなると独身時代の手製家具では格好がつかず、大奮発をして当時初めて日本で生産されたといってもトーネットのイミテーションデザインの鋼管椅子テーブルと妻が持参した和だんす式鏡台、書架、食器棚の他に型而工房の小椅子、肘付き椅子、洋服ダンスを買い込んで近代インテリアの住居らしいものができあがったのである。」（\*2, pp.45-47）
- 17 橋口信助、あめりか屋含む近代住宅の研究は内田青蔵氏の研究に詳しい。また先に挙げた同潤会アパートに就いての研究もある。『あめりか屋商品住宅』（星雲社、1987年）『日本の近代住宅』（鹿島出版会、1998年）等の著書・論文参照。
- 18 青木正夫・岡俊江・鈴木義弘『中廊下の住宅 明治大正昭和の暮らしを間取りに読む』（住まい学大系102巻2009年発行）p.100
- 19 建築学自体はシアトルのビジネスカレッジで学んでいる。
- 20 しかし、西洋文化をそのまま引き写すことが生活の改善につながる道だとは考えていない。「米国のとうに他国のものを自国の生活に適應するよう創りかえることに改良の理想を見ていたこと」を内田氏が指摘している。それは「日本の風土・気候・人情・習慣等」の考慮から生まれることにも橋口本人が言及している。と同時に、折衷様式は過渡期の産物として最終的には批判的な態度をとっていることも明らかにされている。（内田青蔵「住宅改良会会主橋口信助の住宅観について」（日本建築学会関東支部研究報告集、1983年）
- 21 内田青蔵「大正7年『あめりか屋建築案内』から見た設計方針と顧客層について」（日本建築学会大会学術講演梗概集、1985）
- 22 後には設計士を持ち、日本の住宅事情に合わせた設計も行っている。（内田青蔵「あめりか屋」の沿革と技師について）（日本建築学会関東支部研究報告集、1984年）
- 23 ここに東京高等工芸学校での森谷延雄、蔵田周忠等講師の影響を見ることも出来るのではないだろうか。
- 24 小学校が椅子式に改められていくのもこの生活改善運動が椅子式を励行した事によるものである。床座と比べて行動の機敏性が上がり無駄が少なく合理的であり、なおかつ子供の発育にとっても有効だとの判断からである。
- 25 蔵田はこの講演に参加している。
- 26 この団体は後の「木材工芸学会」で機関誌も「木材工芸」となる。
- 27 この欧米留学で「アメリカの量産システムやドイツのモダニズム・デザインに注目した木檜想一」（神野由紀「森谷延雄におけるアーツ・アンド・クラフツ的志向の背景」（デザイン史フォーラム編『アーツ・アンドクラフツと日本』（思文閣出版発行、2004年）（以下\*5とする）p.168）と森谷延雄との興味・関心の違いが明らかである。これらは以下で行動記録を元に詳しく調査されている。森

- 仁史「日本のモダンデザインを繙く」(『デザインの揺籃時代展』松戸市教育委員会, 1996年)
- 28 木檜一「住宅家具設計及製作図」(博文館発行, 1922年)(以下\*6とする)
- 29 「刳形・彫刻・施盤及寄貼・象眼其他金具等も亦凡てスタンダードの加工品を適用したものである。」( \*6, 凡例)
- 30 「此の二つの目的に対して今日の家具を改良する根本は、即ち座居を廃して椅子式となすことにして」(木檜一「木材工芸叢書一号 家具の設計及製作」(博文館発行, 1922年) p.2) とあり、この二つの目的とは〈一、仕事の立ち働きのための能率の増進、一、慰安的な要求に対する能率の増進〉である。
- 31 「然るに居間であるとか、あるいは食堂、其他子供室、寝室などは専ら主婦の支配に属するものであつて、前の応接室や書斎の家具類に較べましても其用ひ方が遥かに複雑であります。」(木檜一「文化生活と家具」(『建築雑誌35』日本建築学会, 1921) p.307)
- 32 「既に各室の目的が明らかに定まった上は、其の室内の目的に最も相応しい情味を整えることに苦心せねばなりません。」(木檜一「工芸常識講座 近代生活の家と家具と装飾」(三省堂発行, 1930年) p.33) 近代生活という名前が表すようにこれは近代の合理性を備えた住宅が前提であるが、ここで見えることは、前提であることが可能な人々へ向けているということである。
- 33 筆者「蔵田周忠の建築思想の独自性 ― 代表的著述を手がかりに ―」(デザイン理論58, 2011年)(以下\*7とする)
- 34 その試みの数少ない実作品として第11回国民美術協会展覧会への出品作品がある。森谷主導で木材工芸会にて行われたものなので、木檜一の、というより森谷延雄の考えが反映されているかも知れないが、装飾のない構造的なものになっている。
- 35 2007年佐倉市立美術館で開催された森谷延雄没後80年の展覧会のタイトル「大正時代を駆け抜けた夢多きデザイナー」や2010年のINAX ギャラリーでの「夢見る家具展 ― 森谷延雄の世界 ―」というタイトルからも分かるように詩的な側面が大きく捉えられている。
- 36 「家具の新運動「木の芽舎」(昭和二年)を起こしていたが、ドイツの表現派に通じるものであったので、蔵田先生に教わるまでも私たちもこの表現派に多くの影響を受けていた。」\*2, p.314
- 37 「デザイナーが製作者の仕事を尊重し互いに協力し合うことで質の高いデザインを実現する、そして良い趣味で生活を満たすべきという彼のデザイン観はウィリアム・モリスの思想と重なる部分が多い。」\*5, p.168
- 38 「彼の根底にあったのは趣味のよい=心地よい室内装飾の創造であって、あくまでも「趣味としての生活改革」であったことは変わらない」\*5, p.168
- 39 「英国の工芸運動に刺激されて、工芸品乃至家具に始まり室内乃至建築に及ぶ生活の芸術的様式を、全體として、新しい世界に持ち来す観念が、此運動によって徹底的に表現されたのである。モリスの提唱した住宅に対する統一運動を原理とし、更に藝述全般に亘って「統一的空間形式」を創らうとの努力」(蔵田周忠『近代建築思潮』(洪洋社発行, 1924年)) p.69
- 40 久保加津代・秋山晴子「1921年から1934年の「婦人之友」誌掲載住宅プラン」(日本建築学会大会学術講演梗概集, 1981年)には「婦人之友」誌の読者層が中上流だとした上で、それでもなお居間中心

型の合理性をもった住宅が浸透していないことを述べている。

- 41 「婦人之友」誌上での頒布の後「婦人公論」誌上でも同様啓蒙活動と頒布を行っているが、この婦人雑誌の運動、関わり、それぞれでの型而工房の活動は本論ではまとめきれないので、別稿に改めることとする。
- 42 「進歩的家庭の主婦への説得が予想以上の効果をあげた」(\*1, p.42)
- 43 現在の婦人之友社のHP (<http://www.fujinotomo.co.jp/about.html>)にも「まさに生活者が生活者におくる「家庭雑誌」や「衣・食・住・家計の生活技術が身につきます。」(同HP, 2018.08)というコピーがあり、この雑誌の根底にある考え方を見ることができる。
- 44 「当時「婦人之友社」は新しい理念のものに様々な活動をしており、工房の活動に共感し申し入れがあったようだ。そして頒布活動を利用して誌面を通した生活改善が進められた。」\*1, p.40
- 45 「婦人之友」に1929以降に掲載されている「百二十圓以下の家計」(「婦人之友」23巻12号(婦人之友社, 1929年)(以下同雑誌は\*8とする)「百五十圓以下の家計」(\*8, 24巻1, 2, 3, 4, 6号等)をみても当時の平均より少し上層の人々が対象であった。「百五十圓以下の家計」(\*8, 24巻3号, 1930年 p.128)の一人は月収が126円で賞が500円あるが、家具費と名目の支出は月0.5円である。一年間で6円程度となる。これは婦人之友社で予約販売された小椅子の値段と同額である。(\*1, p.41) この家族は三人暮らしであるからもし椅子机を揃えたとすると、32~38円(角卓子14円, 小椅子6円, 肘掛椅子12円, 荷代抜き)となる。決して安くはないが、これをみても型而工房の家具が生活改善を夢見て眺めるだけのものではなく、手を伸ばせば実際に手の届くものであったことが見て取れる。



